

●前庭の常緑樹－同じフナ科でも、椎の木は、残った。樫の木は、切られた。

散策集合場所の砂利敷きの無原罪宣教女会修道院の前庭には、マテバシイ、スダジイ、シラカシの大木が並んでいます。関東でシイといえば、スダジイです。シイは、木材として腐りやすいので伐採されることが少なく残りましたが、カシは、豪族が館を建てる木材に使うため伐られました。

実がなるのは9月後半頃からです。マテバシイ（硬いですが）とスダジイの実食べられます。

●落葉高木－ニレ科の三兄弟－ムクノキ、エノキ、ケヤキ

大きくなる落葉樹です。前庭の砂利敷きでない所には、実生（みしょう）のムクノキ、エノキが育っています。ムクノキの葉の裏は、ザラザラしているので細かい番手のヤスリの代用として、輪島塗で木地を研ぐのに使われました。エノキの葉は、ツルツルしています。→右写真

エノキは、一里塚などに植えられました。ケヤキは、奈良時代から木材として使われたようです。江戸時代には木材用に幕府が奨励して植えさせました。今でも多摩には残っていますね。

10月頃に、ムクノキは黒紫色、エノキは、黄色～褐色の実をつけます。

●樹木が生き延びるための工夫

○実生（みしょう）で増えるには？

実から芽生えて育つのを実生といいますね。水分と養分のある場所に落ちたり、運ばれたりした運のいい実が芽吹きます。どんぐりは、主に自然落下です。鳥に運んでもらう鳥散布、風に運んでもらう風散布があります。実の大きさに対応して、ムクノキは、椋鳥、鳩、烏など、エノキは、雀程度の鳥、ケヤキは、とても小さくて、葉と一緒に風に乗って運ばれます。

実をならせるためには、受粉しなければなりません。6月が一番虫の多い季節で、その頃花が咲いて虫に受粉させてもらう木は多いです。保護区内には虫が多いのでしょうか。冬に実が赤くなるナンテンもマンリョウも実がたくさん着いていますよ。→右写真

○日陰で育つには？

樹木は、葉で根から吸った水と葉の気孔から取り入れた二酸化炭素を原料にして、太陽の光のエネルギーを使って養分（デンプンなど）をつくり酸素を出します。太陽が当たるように

- ・葉に切れ込みを入れて陽に当たりやすくする。→クワ（桑）→右写真、ナンテン→右写真
- ・枝でも光合成を行うため、枝にも葉緑体をもつ。→アオキ。日陰に強く、大きな木々の茂る足元では、アオキばかりになってしまうことがあります。葉が枯れると黒くなるのはタンニンのせいです。枯れた株の代わりに新しい株が育っていれば、生き残っていきます。→右写真

●トクサとその笛－懇談会でのお話から

トクサは、3億年以上前の石炭紀の生き残りです。当時は、直径50cm～1m、高さ5m～10mといった大きさのものが湿地帯に林立していました。これが倒れて積み重なって、後に良質の石炭になりました。

トクサの茎は空洞ですが、節をもち表面にガラス繊維の突起をもつことによって、形（硬さ）を保っています。

手を切ることはありませんが、これで爪を研ぐことができるので、トクサといわれます。

一節を切って笛が作れます。石井さんが吹いてくださいました。澄んだ力強い音でした。（右上写真）

右下のトクサの写真は、特別保護区外で撮影したものです。



トクサで作った笛（石井さんからの土産）



●いろいろな色の実－青、黒、赤、黄色



ヤブミョウガ
葉が似ているので、ミョウガと間違えられます。白い花の後、青い実がなります。
*1



シロヤマブキ
真っ黒な実がなります。実がならないのは、和歌*2で歌われるとおり、八重だけで、一重の黄色い花のヤマブキも実がなります。
*1



サンゴジュ
肉厚の葉に保水力があるので、防火に効果があるとされています。赤い実からサンゴジュの名がつけました。
*1



マメガキ
未熟なうちに収穫して、つぶして発酵させて柿渋をとって、防水や防腐に使いました。（傘や団扇など）。
*1

●いろいろな葉



クワ*3
同じ木の葉でも陽当たりによって、形が違ってきます。
*1



ナンテン
先端の3枚の小さい葉をはじめ多くの小葉の全体から大きな葉が構成されています。実、これから赤くなります。
*1



アオキ
緑の葉の陰に、緑の茎と枯れた黒い葉（手前）が見えます。
*1



ムクノキとエノキの若葉*3
右手がエノキ、左手がムクノキ、写真では分かりませんが、触ると違いがありました。
*1

●蝶と蝉



アカボシゴマダラ
写真は、後日撮影したものです。当日は、アオスジアゲハやモンキチョウも飛んでいました。



ツマグロヒョウモン



セミの出た穴と抜け殻
抜け殻は、たまたま近くに落ちていました。



セミの抜け殻
高い所の葉先に抜け殻が並んでいました。

*1 参加者の穂本健二さん撮影。トリミングしてあります。
*2 1にわか雨に降られた太田道灌が民家に立ち寄ったところ、その娘がヤマブキの枝を差し出した話にあるように「七重八重花は咲けども山吹の実の（蓑）ひとつだに無きぞ悲しき」と歌われた八重咲きのヤマブキは、奈良・平安時代から植えられていたようで、挿し木で増えます。
*3 特別に葉や小枝を採集させていただきました。